



『ラジオの時代：ラジオは茶の間の主役だった』

竹山昭子 世界思想社

本

館

請求記号：K/699/Ta68

資料ID：111577854

ネットワーク情報学部准教授 杉田 このみ

2025年は日本でラジオ放送が開始して100年となる。1928年生まれの著者が「ラジオの時代は私のメディア体験そのもの」（あとがきp.347）と述べている通り、小学生の時に聞いた「真珠湾攻撃」のニュース、夏休みの「ラジオ体操」、「国民合唱」に声を合わせ、スポーツ実況に大興奮。そして玉音放送を耳にする。

しかし、本文にはその経験についてはほぼ触れられていない。ラジオメディアの特性を体現した番組などについてさまざまなテーマから探究している。新たな文明の利器に市民はどう向き合ってきたか、時報システム、天皇報道、オリンピック実況放送、ラジオドラマ、ラジオ体操、占領期CIEによる民主化の指導などについて、戦前のラジオ番組は録音が残っていないため、当時の新聞や雑誌、記録、評論等から丹念に調べ記述する。私たちが今当たり前に思っているラジオのあり方が、多くの試行錯誤であったことを楽しく学ぶことができる一方、著者の研究調査に対する熱量に圧倒される。それはやはり、幼き頃からのラジオ体験からきていると思われる。

2002年刊行からラジオ研究はさらに深まり、広がってきている。しかし、ラジオ放送とともに人生を歩んできた研究者による著書はこれ以降出ることはない。そういう意味でも本著はメディア研究の指針であり続けるだろう。